

『緋文字』の心理学的考察

In my beginning is my end.

—T. S. Eliot—

小堀三郎

はじめに

T. S. Eliot は『伝統と個人の才能』の中で、芸術家の価値についてつぎのように述べている。

どのような詩人でも、どのような芸術部門の芸術家でも一人だけで完全な意味を持ってはいない。彼の意義、彼の評価は既往の詩人や芸術家に対する関係の価値である。彼一人を単独で評価することはできない。既往の芸術家たちの間に置いて対照し比較しなければならぬ¹⁾。

ここでは芸術家個人の才能はより大きな伝統的価値の形成要因であり、そこでの創造性と貢献性において関係価値の正当性が問われることになる。このことは芸術家個人の才能が絶対的、独立的なものでなく、それが対比されるべき伝統を超えることができないことを意味するものである。したがって芸術家個人の立場からみれば、彼の才能を育み、開花させ、その結実を受容する伝統と文化の中に自己を見出しうる偶然的要因がその価値決定の上で大きく作用するといえることができる。

文学はそれ自体いかにすぐれた完成度をもち、いかに普遍性をもとうとも、そもそもその成立において特定社会と結びついている以上、その時代と文化の所産であることは否定できない。また、そこに土壌と素材を求めて芸術を営み、「固有のもの」として自己展開しようと、そこでのかかわりのうちに根拠をもつ以上、その活

動生命にまつわる偶然性を否定し去るわけにはいかない。ここに開陳を試みる小論の主題『緋文字』を T. S. Eliot の主張に照らしてみると、伝統と文化の未成熟さにおいて、作者ホーソンは「不運な時代」に生きたといえるかもしれない。つまり、「百年前のニュー・イングランドは、政治的には独立していたにもかかわらず、精神的には英国諸島の外郭的領土であった²⁾」し、彼が住んでいたセイラムの町は「ニュー・イングランドが、当時、社会的にきわめて小さな存在であったとすれば」「いっそうささやかな存在であった」からであり、さらに「もし総体的にみたアメリカの調子がひどく地方的であったとすれば、ニュー・イングランドのそれは、その最良のものをもっていたからといって、とりたてていうほどのものではなかった。アメリカの状態はきわめて自然そのままであった³⁾」からである。『緋文字』の長所の半ばはその「地方的特質」にあるという H. ジェイムズに対して、H. リードはスターン、ブロンテ、さらにワーズワースをも例にあげて「わが国の文学の最良のものの多くは本質的に辺境的である⁴⁾」と主張しながらも「芸術の花は土壌の深いところにのみ開くということ、ささやかな文学を生み出すためにも豊かな歴史を必要とすること、作家を活動させるためには複雑な社会機構を必要とすることなど⁵⁾」をホーソンの「好ましからざる面」から教訓として指摘する

1) T. S. Eliot, "Tradition and the Individual Talent", *Selected Prose*, Penguin Books, p. 23.

2) H. Read, "Hawthorne", *Collected Essays in Literary Criticism*, Faber and Faber, p. 272.

3) H. James, *Hawthorne* (小山敏三郎訳), 南雲堂, p. 35.

4) H. Read, *ibid.*, *op. cit.*

5) H. James, *op. cit.*, p. 8.

H. ジェイムズへの共感は忘れない。この指摘は文学の批評理論の上からは有益な教訓であろうが、それは作家個人の芸術活動の条件を意味するものであって、作家自身が負うべき責任はここにはない。ホーソンにとっては、ただ彼が19世紀に生きたこと、彼がアメリカに生まれたこと、そして辺境のセイラムに生きたこと、これが彼のすべてであった。それゆえにこそ批評理論に「教訓」を与える結果となった「不運な作家」とはいえるかもしれない。いわばホーソンが「あらゆる意味で完全なアメリカ人であった⁶⁾」という事実がそのすべてを語っているといえよう。

I

『緋文字』の最初の場面は生後3月ほどの嬰兒を抱き、それを抱く胸には、罪の証しとして“A”の緋文字を付けて処刑台に立つヘスター・プリンの姿であった。人間の自覚的生が自から目覚める前には、そのはじまりに必要な長い時間が横たわっているのが常である。『緋文字』の物語りが1人の女性によってすでに罪が犯されているという事実から出発するこの場面の省略された背景には、この社会の道徳的規範を支える長い時間がある。「宗教と法律とがほとんど一体⁷⁾」化し、処刑台上からヘスター・プリンが「見物人に求めうる同情が乏しく、じつに冷たい⁸⁾」この社会の揺がざる道徳的規範力にその事実が示されている。秩序を犯し、時間を超えてここに現われたこの女性は緋文字に象徴されるように「罪」そのものであり、そして「罪」とともにすべては始まる。リーウィスが「この場面およびこの小説によって新世界の小説は最初の完成に到達し、またホーソンは自己の完成に達した⁹⁾」というとき、見物人たちから見上げられているこの「罪人」は罪人以上の、

長い準備的時間の果てに生れ出た「アウトサイダー」としての1人の女であり、1人の人間にほかならなかった。この種の凍えた秩序の支配する社会にあっては、個人は独立した人格ではなく、均された社会に突出した患部であり、また自己を生きることとは人間性そのものの墮落を意味する。法と道徳の光の照射されたもの以外、そこに存在を許されない以上、そこでは個人は「光」の及ばぬ心の奥底に一切を隠蔽する。個人は「秘密」であり、そして「謎」の存在である。ホーソンは人間の真実をこの「謎」を通して求める。ヘスター・プリンが女として人間としてその暗黒から姿を現わしたとき、「罪」がそのために支払わねばならぬ代価であった。彼女の存在自体が「罪」なのだ。そしてその彼女はフィジカルな罪の象徴としての嬰兒を抱いていた。ここにこの社会はヘスター・プリンという異端児の誕生をみる。リーウィスはさらに続けて「この場面によってアメリカ社会における暗い、不実な一切のものが暴露された¹⁰⁾」とみる。しかしながら、その後のヘスター・プリンが世間の人々につくす奉仕の態度と道徳的意志をみれば、彼女と道徳的秩序との間にはすでに「和解」が成り立っているともいえる。「患部」は明るみの中で摘出されたとき、時間の抗力によって完全に「治癒」されているようにみえる。少なくとも表面には人目を奪ういかなる事件も起こっていない。この意味で「このスケッチの舞台は一種の中立地帯、……創造のための舞台である¹¹⁾」というT. マーチンの言葉は、尊重したことにおいて「すばらしい」とH. ジェイムズにいわしめた深層心理¹²⁾を展開する前景としての効果性をもつことの含みとみることができる。したがって「どこかその(舞台の)背後か下部には彼(ホーソン)の想像力が自由に流れ、いきいきしてはいるが、混交して抑止できないイメージを産み出す“the haunted mind”が

6) *Ibid.*, p. 52.

7) N. Hawthorne, *The Scarlet Letter*, Anchor Books, p. 40.

8) *Ibid.*

9) R. W. B. Lewis, *The American Adam*, The Univ. of Chicago Press, p. 111.

10) *Ibid.*

11) Terence Martin, *Nathaniel Hawthorne*, Twayne's United States Authors, Series p. 46.

12) H. James, *op. cit.*, p. 70.

13) T. Martin, *ibid.*, *op. cit.*

あり¹⁴⁾」これが「ホーソンの主題¹⁴⁾」であるという彼の見解は『緋文字』の世界を考察する上で重要な視角を示しているといえよう。

ヘスター・プリンが「暗い」牢獄から処刑台に向かうときにみられたものは、犯した罪の意識に苛まされ、改悛に沈む姿ではなく、「自由意志」に導かれるかのように歩み出てくる姿であった。Adultery を犯しながら、このときほど貴婦人のようにみえたことはなかったという。以前の彼女の過去を知る人々の予想を裏切って「輝くばかりの美しさと、彼女を包む不幸と恥辱までが後光となっているのを見て¹⁵⁾」かれらは驚いて目を見張る。「もっとも神聖な人間の生の資質の中にもっとも深い罪の汚れがあ¹⁶⁾」る彼女の宿命的矛盾は生存そのものの根底に根差しており、さらにその「美しさ」と、罪を通して儲けた嬰兒のために「いっそう墮落し¹⁷⁾」た姿として彼女を衆目に曝す結果となっている。しかしその「罪」のうちになまなましい生の実感を感じながら立つ破目になったその処刑台は「幸福な幼女時代に歩んできた全過程」を過去のものとしてヘスター・プリンに示す新しい視点となる。

Be that as it might, the scaffold of the pillory was a point of view that revealed to Hester Prynne the entire track along which she had been treading, since her happy infancy. Standing on that miserable eminence, she saw again her nature village, in Old England, and her paternal home; a decayed house of gray stone, with a poverty-stricken aspect, but retaining a half-obliterated shield of arms over the portal, in token of antique gentility. She saw her father's face, with its bald brow, and reverend white beard, that flowed over the old-fashioned Elizabethan

ruff; her mother's, too, with the look of heedful and anxious love which it always wore in her remembrance, and which, even since her death, had so often laid the impediment of a gentle remonstrance in her daughter's pathway. She saw her own face, glowing with girlish beauty, and illuminating all the interior of the dusky mirror in which she had been wont to gaze at it¹⁸⁾.

ホーソンは Adultery の罪を通して、聖母マリアに抱かれ「この世を贖うことになっていたあの赤子¹⁹⁾」を思い起こさせるヘスター自身の赤子を示すとともに、彼女が育まれてきた社会と過去の全体を見下す「新しい」女としての、「新しい」人間としての自覚的な生の誕生を「罪」の名のもとに暗示する。過去の現実的なものは彼女が生まれ変わったとき、すべて幻影と化してしまう。処刑台上の彼女にとっていま現実的なものといえば、胸の赤子と罪の象徴である緋文字の“A”しかなかった。「この二つのものこそ彼女がいま実際にもっているものであり、その他のものはことごとく消え失せてしまった²⁰⁾」のだ。法の要求にもかかわらずAdulteryの相手の名前の暴露を頑くなく拒み、処刑台に向かうときの足取りに感じられたあの「自由意志」にもとづく当然の結果として、その「罪」を受容するのは自己の内的真実を自己固有のものとして守ろうとする決意の表われでもある。彼女の罰の内容は処刑台に曝しものとして3時間を立ち、全生涯にわたって罪の証しとして緋文字の“A”を胸につけることであった。情状酌量によってこの罰にいたったものの、本来ならば死罪に相当するといわれるとき、その罰が意味するものは、彼女の社会的「死」である。彼女の暗い真実はその「死」とともに「明るみ」から胸底深く隠されてしまった。しかし彼女が、

14) *Ibid.*

15) *Op. cit.*, p. 43.

16) *Ibid.*, p. 45.

17) *Ibid.*

18) *Ibid.*, pp. 46-47.

19) *Ibid.*, p. 45.

20) *Ibid.*, p. 47.

見物する群集の中に「肩の一方が他方より高くなっている²¹⁾」男を目撃したとき、すでに幻影と化したはずの過去の世界から鋭い嗅覚で心の中に入り込んでくる一つの影を感じる。一方、台上に彼女をみて一瞬現わした「のたうち廻る苦悩」を以前の表情に包み隠したこの男は、チリングワースと称し、この地へ渡来するさい、仕事の処理のため、妻よりも少々渡来が遅れたというが、それまでは夫妻でアムステルダムに住んでいたという。その妻がいま目の前で Adultery という不名誉な科で処刑台に立つヘスター・プリンであった。この場面の目撃によって彼は人目に触れない心の中で「変身」する。過去において並の人間が抱くようなささやかな夢を秘めていた点においては凡庸な人間であった。美しいヘスター・プリンとの結婚を回想しながら、「年もとり陰気で不具であったとはいえ、到るところに散らばっていてそして誰もが自由に拾い集めることのできるあの単純な幸福を自分のものにしたいと思って²²⁾」いたと「罪人」のヘスター・プリンに告白するこの言葉は弱者の感傷を感じさせる。しかし彼がいま目撃した事件によって「他人との関係を断たれた」ことを感じたとき、自からを「放浪者²³⁾」と認めて、感傷から立ち上がり、過去と絶縁して、これまでの自分をかなぐり捨てて。存在にまつわる「蔭」を断ち、現存を規定する過去を駆逐したものにとって運命の決定者は自己をおいて他にいない。しかし人間が自然界において所詮「一本の葦」にすぎない以上、運命の自己決定とは、人間固有の尊厳をすすんで否定することにほかならない。チリングワースが未だ「知られざる」Adultery の隠れた共犯者に対する復讐のみを今後の生の支えとしていこうとする態度には、「人間性」に背を向けた冷たい情熱しかない。彼は「人知れず生き、そして死²⁴⁾」のうという絶望を背にした「放浪者」の決意を明らかにする。

I shall seek this man, as I have sought truth in books; as I have sought gold in alchemy. There is a sympathy that will make me conscious of him. I shall see him tremble. I shall feel myself shudder suddenly and unawares²⁵⁾.

かつては「思索の人間で大きな書庫の虫²⁶⁾」として「知識に飢えた夢をみて人生の盛りの歳月を過してきた²⁷⁾」人物によくみられるように「いつも主として心の中ばかりを見ているために外界の事象は心の中の何かと何らかの関わりがなければ少しも価値がないという類の人間²⁸⁾」であるチリングワースは、その時以来、書物の中に真理を求めていた知性を自己の意志が設定した目的に奉仕させようとする。彼の全世界はいまや彼自身の掌中にある。もはや彼は自己の決意を新たな生の最高原理へと押し上げることによって、人間的感情をことごとく踏み越え、人間的行為の規範となるべき善をも正義をも超えて立つ、復讐とは本来、特定の対象との関係感情である。この種の感情の生命はそこでの関係の持続性にある。感情の向けられた対象、あるいはその間の関係が消滅するとき復讐もまた自滅する。これが復讐の一般的構造であろう。だがしかし、チリングワースの復讐は感情を超えたものがある。感情は衝動としてのみ作用し、意志に点火した後は感情の座を知性が占める。彼の知性は本来、人格において従属すべき「心」から遊離し、何ものをも超えて知性独自の論理にしたがって行動する。無原則の知的活動の前には「神聖」はない。彼は復讐にあたって「その男の名前を明らかにして人間の作った法律に訴えたり、その生命を脅やかしたり、あるいはその名誉を傷つけたりはし²⁹⁾」ないという。未だ彼には知られていない「その男を自分のもの

21) *Ibid.*, p. 48.

22) *Ibid.*, p. 59.

23) *Ibid.*, p. 61.

24) *Ibid.*

25) *Ibid.*, p. 60.

26) *Ibid.*, p. 59.

27) *Ibid.*

28) *Ibid.*, p. 48.

29) *Ibid.*, p. 60.

にしてみせる³⁰⁾」という決意を語る瞬間に彼の生の根柢は復讐の対象となる男の中に見出す結果になる。その異常性は関係の深さにある。彼は冷ややかな情熱に自己を燃焼しながらも、穏やかな表情で彼の本姿を包み込んでしまう。ここでは、彼もまた「秘密の人」とみることができる。「秘密」以前の彼はつぎのような人物であった。

Old Roger Chillingworth, through life, had been calm in temperament, kindly, though not of warm affections, but ever and in all his relations with the world, a pure and upright man. He had begun an investigation, as he imagined, with the severe and equal integrity of a judge, desirous only of truth, even as if the question involved no more than the air-drawn lines and figures of a geometrical problem, instead of human passions, and wrongs inflicted on himself. But, as he proceeded, a terrible fascination, a kind of fierce, though still calm, necessity seized the old man within its gripe and never set him free again, until he had done all its bidding³¹⁾.

ホーソンは深層心理を展開する地固めとして、暴かれたヘスター・プリンの罪を除いて、すべてを秘密のうちにすすめる。彼女は生涯を通じて受けねばならぬ罰を耐えて「恥さらしや物笑い程度の刑罰も死刑同然のきびしい威厳をもつとも思える³²⁾」その社会にあえてとどまる。それは峻厳なこの社会以外の多様な世界の存在を知らないがためではない。彼女の前には道が開かれている。ヨーロッパに渡り、そこに新たな生活の場を選ぶことも可能であり、この社会とは隔絶した暗い森の中で、彼女の「野性的性

格」に相応しい人々を見出すことができるかもしれぬという。新しい生活とともに現在の彼女の不名誉と決別することができよう。しかし彼女は「不名誉となることを避けられぬこの場所を敢えて“故郷”と呼」んで罰を耐えてここにとどまる。

It may seem marvellous, that, with the world before her,—kept by no restrictive clause of her condemnation within the limits of the Puritan settlement, so remote and so obscure, —free to return to her birthplace, or to any other European land, and there hide her character and identity under a new exterior, as completely as if emerging into another state of being,—and having also the passes of the dark, inscrutable forest open to her, where the wildness of her nature might assimilate itself with a people whose customs and life were alien from the law that had condemned her, —it may seem marvellous, that this woman should still call that place her home, where, and where only, she must needs be the type of shame³³⁾.

Adultery をめぐってヘスター・プリンが可視的な「罪」のしるしを負って社会の明るみの中でそれを耐える道を選んだとき、チリングワースはいっそう暗いところに身を潜め、復讐のみを唯一の目的として「闇」への放浪に一切を賭ける。

彼女が胸に緋文字をつけることは、「罪」の事実に対する「社会的宣言」である。彼女が社会的・道徳的制裁としてその罰を甘受していることは、もはやその罪性が彼女自身の心性に委ねられていることを意味しよう。いわば彼女はこの「宣言」によって社会的・道徳的許しの可能性を得ているといえる。ここには、もう一つの

30) *Ibid.*

31) *Ibid.*, p. 102.

32) *Ibid.*, p. 42.

33) *Ibid.*, p. 63.

「宣言」がある。チリングワースの胸中の「私的宣言」である。心的諸価値を自己の生から断ち切った彼の心性からは、罪意識も、超越性への祈りも、人間的相互愛という普遍的感情も剥離してしまっている。彼を制約するものはその破壊を目論む復讐の対象しかない。これは背理である。現実的生にまつわる関係を断って自己を無限に上昇させるとき、すでにそれは現実性を欠く抽象的存在へと転落している。チリングワースはホーソンの他の作品にもみられるように、「人間」を忘れ無原則の知性の働きによって自己の世界の完全性をめざすタイプ、たとえば、ジャッジ・ピンチョン、ホリングワース、ドクター・ハイデッガー、エイルマーなどの類に属する。彼らは学問的思惟にとまらぬ“Abstraction”を精神的特性としており、人間の諸資質の中でその分限を超えて相対的均衡を破壊して、「心」を侵蝕している点において共通する。T. マーチンがこれについて述べている言葉は、ホーソンの人間観を見事に突いている。「ホーソンにとって「人間性」との触れ合いを失うことは必要な道徳的、感情的および心理的均衡を崩すことである。その大きな危険物とは、高慢、エゴチズム、復讐あるいは苦しみからであれ、人を人間性から断ち切ってしまうあの観念愛の放縦である“Abstraction”なのである³⁴⁾」

II

「光」からその実体を隠蔽する人間の心理を映し出すために、ホーソンは計算された配慮のもとに彼特有の“Camera Obscura”を準備する。秘密に呼応するのは「闇」の世界である。それは知性の光による解明を拒む。一方、知性はその光による解明を事として秘密を嗅ぎ求める。H. メルヴィルが「世界は自からを解き明かすことができない³⁵⁾」と言ったとき、「世界」とは「自然」であり、このことによって彼は、人間の知性とその本質において反自然的であることを認めている。これが彼の心の刺であり、

その刺ゆえに「絶叫」した³⁶⁾といえよう。ホーソンにとっては知性は自然性において心情と等価的でなければならない。「心」が犯すべからざるその「 sacrament」である。彼にとっては道徳的規制の厳しさも個人の深層心理を効果的に映し出し、そこに人間の心理的実体を捉えるための媒体といえるかもしれない³⁷⁾。「罪」の事実が始まる『緋文字』の世界は象徴的な緋文字“A”を露わにしたその社会の「明るみ」と同時に、その背後にある「闇」をわれわれの目の前に提している。復讐感情と高度の知性を織り混ぜたチリングワースがこの「闇」に放たれたが、未だその「獲物」は依然としてそこに身を潜めている。

チリングワースがこの事件の裏にある秘密を嗅ぎつけたのは「敬神の感情が非常に発達し、信仰の道を強力に押しすすめ、しかも時間の経過とともに絶えずその道を深めて行く心の秩序³⁸⁾」をもつ、およそ Adultery とはかわりがあったらならぬはずの若い高名な牧師ディムズディルであった。「真の牧師」、「真の宗教家」といわれ、この社会の最高の精神的指導者として民衆に神の教えを説き、信仰を導くディムズディルがチリングワースと避けがたく結びつくことによって、その関係から生じる苦悩と葛藤は誰の目にも触れない奥深い場所で進行していく。それは両者にとって「宿命的な」出会いである。「若い頃から当時の医学を広範囲に知悉し³⁹⁾」ていただけでなく、同地の無知な蛮人との接触から得た「大自然の贈り物」としてのかれの単純な医学から野草の効能についての多くの知識を修得し、「少くとも表面上模範的な宗教生活を営む⁴⁰⁾」このチリングワースとの出会いはディムズディルの健康が極度に衰え始めたときであった。牧師の病状の場合、誰の目にも明らかな「憔悴」という外部的特徴を除いて、

36) H. Melville, *Moby Dick*, Collins Classics, p. 367.

37) cf. Alfred Kazin, “Introduction” to *The Scarlet Letter*, *op. cit.*, p. x.

38) *Op. cit.*, p. 97.

39) *Ibid.*, p. 94.

40) *Ibid.*

34) T. Martin, *ibid.*, *op. cit.*

35) *Ibid.*, p. 116.

その出自についてはまったく謎であった。

のようであった。

With all this difference of opinion as to the cause of his decline, there could be no question of the fact. His form grew emaciated; his voice, though still rich and sweet, had a certain melancholy prophecy of decay in it; he was often observed, on any slight alarm or other sudden accident, to put his hand over his heart, with first a flush and then a paleness, indicative of pain⁴¹⁾.

作者は悲劇的な結末を予知させるかのように、かれらの不可避的な出会いの前に、「いつか避け得ぬ瞬間において病人の魂が分解され暗い透明な流れとなって流れ出て一切の秘め事を光の中に出してしまう⁴²⁾」ような力をもつ医師と親しくなることは、とくに「深い秘密をもっている人」は避けるべきであると述べる。「憔悴」の出自を知るディムズディルは「人の手になる薬」を拒み、先輩の牧師たちから「神慮がこのように明白に差しのべている救いを拒絶することの罰⁴³⁾」についていい合ったものの、結局は「教区民のように牧師にまとってく⁴⁴⁾」る医師と相談することを約束する。医師ロウジャ・チリングワースの仔細な観察が捉えたこの患者は、これまでのどんな患者とも異なる奥深い内面に苦悩をもち、そこにはありふれた思想とは異質の、もっと「目新しい精神風景の真只中に投げ出され」ているタイプの患者であった。例外的なものこそ知性にとって関心の対象となりうるものであるとすれば、チリングワースにとって、この患者はまさに必然的な対象性を秘めていた。病状の新奇さに惹かれた彼の慎重な観察態度は患者の内面に入り、その本体を選り分け、過去の思い出を覗き込み、奥深く探り針を差し込んで、まるで暗い洞窟の中で宝物を探し求める人

So Roger Chillingworth—the man of skill, the kind and friendly physician—strove to go deep into his patient's bosom, delving among his principles, prying into his recollections, and probing everything with a cautious touch, like a treasure-seeker in a dark cavern⁴⁵⁾.

2人のこのようなかかわり方について、『緋文字』の世界にチリングワースが存在していなければ、ディムズディルは彼を創り出す必要があったろう⁴⁶⁾という T. マーチンの説明は、かれらの出会いの宿命を物語っている。周囲のすすめによるというかたちで2人は起居を共にするようになる。チリングワースは表面は医師として、内面には復讐の執念を秘めて観察を続けていく間に、精神と肉体との相関関係を反映するかのようになり、最初は瞑想的で学者風であった彼の表情が識らずして「醜悪な」そして「不吉な」表情へと変化していく。傍目には共に健康回復という願いのもとに「医師と患者」との共棲であっても、それぞれ生の立場はまったく異質であり、そこには心の交流はない。自己は自己とのみしか交流がない。かれら個人にとっては自己自身だけが、他の何ものにもまして真なるものである⁴⁷⁾からである。かれらの暗い関係は社会的に健全な装いのもとに、それぞれの秘密を隠蔽しながら営まれなければならない。チリングワースが牧師の胸に見出したものは「思索と研究によって確たるものとなり、啓示によって照らされた人類の幸福に対する高次の願い、魂への温かい愛情、清らかな感情および生来の敬神の念⁴⁸⁾」であったが、彼にとっては無価値な屑としか映らなかった。

死がもつ生の終末性への不安を知らぬものにとって「祈り」は無縁である。彼にとって「今」

41) *Ibid.*, p. 95.

42) *Ibid.*, p. 98.

43) *Ibid.*, p. 96.

44) *Ibid.*

45) *Ibid.*, p. 98.

46) T. Martin, *op. cit.*, p. 125.

47) A. Kazin, *ibid.*, *op. cit.*

48) *Op. cit.*, p. 102.

と「ここ」が全世界である。祈りを捨てたものには悔いはない。これは人間性の欠落の証しを意味するものにほかならない。自からの意志において、かかる自己をめざすとすれば、それは反人間的な心性を示すもので、宗教的には許すべからざる高慢以外の何ものでもない。チリングワースはこの種の人間にすでに墮落している。一方、ディムズデイルの苦悩と苛責は、心と精神との一体性のうちにある。過去が単なる影としてでなく、実在的なものとして現在の彼を覆っている。彼の祈りの感情は「影」ゆえであり、「影」の重さに呻吟しているのが彼の姿なのだ。それが「魂の救済」を求める彼の強い信仰の支えとなっている。いわば牧師にとってはこの支えこそが地上的自己確認のための証しであり、そして唯一の現実的なものとなっている。だが、チリングワースにとっては彼の精神的事実としての苛責や苦悩自体は関心の対象とならない。「苛責と罪との関係において」彼の内的世界を捉えるところに彼の関心がある。このような探索者にとっては牧師の高邁な精神感情すら、たんに「失望」の材料でしかないのだ。

あるとき、チリングワースが墓地の中で散歩中にみつけたという異様な植物をめぐって牧師と交す「謎」問答は、かれら以外の誰からも理解できない隠微な葛藤であった。墓標もなく死者を記念するものがなにも一つない墓の上に生えたその草は、彼によれば「墓標の代りを引き受けて」生前に恐ろしい秘密を隠していた死者の胸から生えてきたもので、それは死者とともに埋められた秘密が自からを形象化したものであるかもしれないという。「あらゆる自然の力は罪の告白を熱心に要求している⁴⁹⁾」というチリングワースの暗示的・誘導的言葉を、いかなる告白も神の深い配慮なしでは不可能なことだと斥けるディムズデイルは、すべてを神に委ねた信仰者の敬虔と威厳とを具えている。

There can be, if I forebode aright, no power, short of the Divine mercy, to

disclose, whether by uttered words, or by type or emblem, the secrets that may be buried with a human heart.……

A knowledge of men's hearts will be needful to the completest solution of that problem. And I conceive, moreover, that the hearts holding such miserable secrets as you speak of will yield them up, at that last day, not with reluctance, but with a joy unutterable⁵⁰⁾.

ディムズデイルにとって、この種の問題の「完全解決」は神慮を通してなされるものでなければならない。つまり、存在するものがそれにとともなう関係自身のうちに根拠をもつ以上、神の深い計らいによって得られるものでなければならないのだ。もし人知によって透視しえない必然が運命であるとすれば、運命にもとづく「問題の完全解決」が唯一の解決の「しかた」であり、したがって「秘密を胸に埋めた」ものはそれを露わにする機会が与えられるまでは衆目がいかに冷ややかであろうと、いかに自らの偽善性に苦しみを受けようと、それを運命として耐えねばならないことになる。

超越的願いは現存の否定と同時的だ。だから、「たとえ、罪があろうと神の栄光と人間の幸福に対する熱烈な願望をもつゆえに、人々の目の前に自分自身の穢れた本姿を曝すのをおそれる⁵¹⁾」のだというディムズデイルの主張には、祈りのもとに己れの運命を静かに甘受する信仰者に相応しい謙虚さにあふれている。しかしチリングワースにとって「必然」は彼の知力のもとでの生起であらねばならない。そこに現われる事実はそれぞれ連関を失った砂のようなものでしかない。個人を人格として形成する人間の心は、その生命ともいえる相関関係を知性のもとに歪められ解体され、非実体的なものと化す。関係の総和としての具体的存在、具体的事実は彼の知性の前では概念とて対象化されてしまっ

50) *Ibid.*

51) *Ibid.*, p. 105.

49) *Ibid.*, p. 104.

ている。したがって、チリングワースが求める「問題の完全解決」は、それがかかわる一切の関係——時間的・空間的・心理的諸関係を断ち切ったときに残る、解剖学的事実でしかない。知的充足はこれで得られるかもしれない。しかし、その欲求の充足である「完全解決」は彼にとってどのような意味をもつであろうか。チリングワースが生きるこの種の矛盾は、ディムズデイルの「肉体と精神との一体性」によって、いっそう鮮やかな特徴として映し出される。

You, Sir, of all men whom I have known, are he whose body is the closest conjoined, and imbued, and identified, so to speak, with the spirit whereof it is the instrument⁵²⁾.

ホーソンの考える人間の自然性が「肉体と精神」との不可分の融和的一体性にあるとすれば、この種の「自然的人間」はしばしば彼の作品にみられるように傲慢な知性の犠牲となっている。『ラパチーニ博士の娘』ではラパチーニ博士は娘ビアトリスから「弱さ」を追放するため、毒液を注いで何ものにも負けない「完璧な女性」をつくりあげた。あるがままのビアトリスは女性的「弱さ」をもつ「自然」そのものであった。彼が求める「完璧な女性」は期待通り実現はしたものの、彼の知的エゴイズムが「自然のままの女性」を彼女から奪ってしまった。この種の例は『あざ』の中でもみられる。主人公の科学者エルマーも完全主義者という点でラパチーニと同類といえる。美しい妻のジョージアナの頬にあるあざが彼の目にとまったとき、彼女の「自然の女性」はその小さなあざの背後に追いやられ、完全な美にとって耐えがたい欠点として、いわば地上的不完全性の象徴として、それは彼の知的関心の対象となってしまう。完全な美への想念に駆られたエルマーのエゴイズムによって、そのあざは彼女の感情の動きにとまって変化する濃淡が語るように、彼女の「存在」そ

のものと分かちがたく密着しているが、これを地上的な証しであるとみなすとき、彼の高慢な欲求はそれを許すことができず、天上的な「完全な」美を自らの手でつくりあげようと試みる。しかし彼の関心の対象となったジョージアナは、ビアトリスの場合と同様に「自然」そのものであり、生の無自覚性においては汚れを知らぬ“innocence”そのものであった。それとの対比の中で、エルマーの知性は自然性のうちに出自をもつものとしてその倨傲が浮彫りにされる。しかし、『緋文字』においてはディムズデイルが“excessive passion”に起因する個人の倫理的問題を抱えながら破滅的苦悩に身を置いている点において、ビアトリスやジョージアナの場合とは本質的に異なっている。彼は高度の精神感情を秘めている。したがって、彼は自覚された「個人」として大きくクローズ・アップしてくる。彼は自己の運命を意識のうえで耐えねばならない。「罪と苦悶」の「重荷を負ってよろめいているのが彼の運命⁵³⁾」という言葉に語られている。この「重荷」ゆえに「罪深い人類同胞にあれほど親しい同情を寄せることができた⁵⁴⁾」のは信仰に秘められた背理である。ディムズデイルはその背理をまだ超越において掴むことができない。罪意識による彼の暗い心性こそが彼をして類まれなほどに真実を愛し、虚偽を憎ませ⁵⁵⁾、同時に「あらゆるもののうちでもっとも惨めな自分自身を憎⁵⁶⁾」ませながら、他方ではそれによって信徒から「神のような青年」「現世の聖人」と称えられ、それゆえにまたいっそう自己の罪と偽善とを心の奥深く新たな悩みとして加えて行かねばならない。彼のこの苦悶の中に復讐の目的を見出すチリングワースの悪魔性は牧師との対比によって鮮やかに描かれる。

After a brief pause, the physician turned away.

53) *Ibid.*, p. 113.

54) *Ibid.*, p. 114.

55) *Ibid.*

56) *Ibid.*

52) *Ibid.*, p. 108.

But with what a wild look of wonder, joy, and horror!

With what a ghastly rapture, as it were, too mighty to be expressed only by the eye and features, and therefore bursting forth through the whole ugliness of his figure, and making itself even riotously manifest by the extravagant gestures with which he threw up his arms towards the ceiling, and stamped his foot upon the floor! Had a man seen old Roger Chillingworth, at that moment of his ecstasy, he would have had no need to ask how Satan comports himself, when a precious human soul is lost to heaven, and won into his kingdom.

But what distinguished the physician's ecstasy from Satan's was the trait of wonder in it⁵⁷⁾.

チリングワースの恍惚感の中で、作者は Satan との相違を「一派の驚き」にみる。彼がこれを付け加えたことはマシーセンの言及⁵⁸⁾が示すとおり、チリングワースが悪魔「的」ではあっても、悪魔にはなりきれぬ人間の限界を示すために払った慎重な配慮とみるべきであろう。

III

罪によって社会との連帯を失ったヘスター・プリンには緋文字を負う「運命」だけが残された。現実との紐帯を失うことによって、彼女は「個人」を獲得したのだ。いかなる「第一歩」もいまの彼女には可能である。すべてを委ねられた彼女があえてこの地への残留を選んだ姿勢のうちに彼女の生を呪縛する「見えざる」倫理

的「鎖」を感じる。それは自律的精神にもとづくもので、彼女のストイシズムの一面とみることでもある。世間に対する自己主張を棄て、最悪の処遇に耐えながら、世間の冷たい評価を好意的なものへと導いた彼女の近隣への奉仕的態度には忍耐といった受動的なもの以上に、「個人」として、自己の人生を「そっくり」生きる意志を支えとした積極的なものがある。「再生」した彼女が奇異な点を少しももたないばかりか、その社会にいっそう順応的なのは内省を語るものにほかならない。彼女は「個人」として処刑台上で見つけた「新しい視点⁵⁹⁾」から「世間の法則」を超えて自分の「心の立法者」に転身することによって「感情と熱情から思索に変った⁶⁰⁾」。彼女が自分のものとした「思索の自由」はその社会では誰にも許されないものであり、たとえ「大西洋のかなたにおいては一般的であった」としても「祖先が知っていたとしたならば、緋文字によって批難される以上の死刑に値いする罪悪と考え⁶¹⁾」られるほどの重大な意味をもっていた。「思索の自由」とは思索が展開される原理からの自由をも意味するものでなければならない。彼女にはそのための新しい原理として「個人」を据えることができる。ヘスター・プリンにとって「自由」とは、あらゆる原理からの解放でもある。ここに彼女の近代的人間像としての特質をわれわれはみる。「罪」によって彼女が自分に失ったものはなに一つないようにみえる。自分の運命選択の自由を得、「女性」を得、子供のパールと同時に母性を得、そして自己自身を獲得することができた。一方、信仰に生の究極的原理をみるディムズデルが示す苦悩は信仰と生の不可分一体性を表わすもので「不可分なもの」を「可分なもの」とすることは「牧師」の死を意味することにほかならない。自由が「死」であり、「死」が自由であるディムズデルにとっては苦悩を耐えて生きるしかない。感情の無制約なものへの流出傾向

57) *Ibid.*, pp. 109-10.

58) F. O. Matthiesen, *American Renaissance*, p. 307 (Hawthorne had thought out the full psychological pattern of his conception, for he was careful to note in his final sentence that the one still potentially saving element that 'distinguished the physician's ecstasy from Satan's was the trait of wonder in it').

59) *Op. cit.*, p. 130.

60) *Ibid.*

61) *Ibid.*

に対する抑止的な働きのうちに信仰の精神性があるとすれば、信仰とは反自然性のうちに自己の根拠をもつものであり、したがって「自然」を超えようとする葛藤は信仰と同根である。ディムズデイルの苦悩はこれら両極における幅と深さを示すものといえよう。この振幅状態に身を置く彼の「秘密に応える⁶²⁾」ものは「闇」である。彼がヘスター・プリンと互いの秘密において結びつくのは闇の中である。

あるとき、牧師は人目のない闇夜に、ヘスター・プリンが「曝しもの」として立った同じ処刑台の上に1人で立った。たまたま通りすがったヘスター・プリンと娘パールとそこで手を取り合ったとき、牧師は、罪の念に駆られてきた「彼自身の生命とは異質の新しい生命⁶³⁾」の温かみを全身に感じて、「このとき、この瞬間の新しい気力とともに彼の長い間の苦しみであったところの、世間に自分の秘密を知らせることの恐ろしさが甦えてきた。そしてこの繋がり——それは不思議な喜びであったが——にある自分を省みて慄え出した⁶⁴⁾」かれらの間の新しい一体的生命感の「不思議な喜び」はディムズデイルがここで感じた秘密の露呈への恐怖によって語られる。それはいままで抑止されていた暗い生命の息吹きであり、「光」のもとでは罪意識に萎えていた肉体的生命の復権要求とみることもできよう。同時に、それは彼の胸中での「牧師」と「人間」との相剋を現わすものでもあろう。

ホーソンが描く人間は「闇」と「光」のもとではそれぞれ異なった相貌をもって登場する。「闇」と「光」の二元的世界を矛盾なしに生きることができるものには苦悩はない。矛盾の超越が信仰であるからであり、信仰の深さはディムズデイルにとってそのまま苦悩の深さでもある。同じ作者の代表的な作品『グッドマン・ブラウン』にみられるように献身的な妻フェイス(=信仰)が「光」の世界に示す従順さや清純さ

とは無縁のはずのもう一つの素顔を悪魔的な闇の饗宴の中に描きながらも、最後に「ブラウンは森の中で魔女たちの集まりを夢に見たのか、望むならそうしてもよい⁶⁵⁾」と付け加えて読者をつき放すホーソンは「闇」と「光」のそれぞれに現われては変化する人間の心象風景を心理的事実として等価的に捉える。これが人間の心の実相である以上、現存として人間は、時々刻々矛盾し合う個々の事実を渡り歩く可変的な存在としかいいようがない。可変性から出発しようとするとき、生はたえず万華鏡的变化を示すために定型として捉えることができない。これは「この世の聖者」ともいわれるディムズデイルの感情が衝動的に流出することによって示されている。

ディムズデイルは森の中で、ヘスター・プリンから、じつは侍医のチリングワースがかつて自分の夫であり、憔悴の彼への接近も治癒を目的としているものでなく、逆に患者の心に苦痛をとどめ、その結果として精神の自己解体を人知れず待っているということを告げられる。このとき彼の蔭湿な悪魔性を批難し、それぞれ犯してきた罪の差異性を訴えて慰め合うディムズデイルは、チリングワースの罪との異質性に目を向け、焦点の曖昧な、そしてどこか感傷的なものを感じさせる。

We are not, Hester, the worst sinners in the world.

There is one worse than ever the polluted priest!

The old man's revenge has been blacker than my sin. He has violated in cold blood, the sanctity of a human heart. Thou and I, Hester, never did so⁶⁶⁾.

もしディムズデイルが自己の苦痛を繰返しのない一回的生の唯一の「糧」としていれば、比較相対から得られる慰めや支えが微塵もないほ

62) T. Martin, *op. cit.*, p. 116.

63) *Op. cit.*, p. 121.

64) *Ibid.*

65) N. Hawthorne, *Young Goodman Brown*.

66) *Op. cit.*, p. 154.

どに仮借ない「現実」に生きているものでなければならぬ。にもかかわらず、チリングワースの「罪」の特異性の批難の蔭にはどこか否定し去ることのできない彼の肉体的存在に根差す「暗い」生命力が宿命的に脈打っているのが感じられる。これはなお彼の解脱からの隔たりを暗暗裡に語るものであろう。教区の信者から「神のような」そして「この世の聖者」と崇められているこの牧師は、精神が純化されようと、なおそこに「肉」をもつものの宿命として、神からも聖者からも隔たった位置に立つ神「のような」人間にすぎず、また「この世」の聖者でしかない「人間」の姿がある。『あざ』のジョージアナのあざが彼女の生の最深部に喰い入っていて、その心的変化に応じて濃淡を示すように、「思索に変わった」ヘスター・プリンも「闇」に入ったときに、その心の中に感情的なものが激しく踊り出て、彼女の「思索」を支配してしまう。ディムズディルと彼女とが邂逅するや、2人の胸の秘密が呼応し合ったのは「闇」に類する森の中であった。7年ぶりに互いに肉体的な生存を確かめ合い、かれらが「同じ世界の住人⁶⁷⁾」であることを感じた瞬間に内部に凍結していたものがどろどろと、そして静かに流れ出る。それは「肉」に根をもつ生命であり、彼女の呼びかけはその種の生の選択を求めるものであった。罪意識に喘いできたその歳月は彼からその肉体的生命をほとんど奪ってしまっていた。このような彼に向かって、これまでの悲惨な運命を過去のものとして清算し、今後の自分の未来は自分で選び、さらに「アーサー・ディムズディル」の名前をも捨てることによって現在の苦境から脱出をすすめるヘスター・プリンの口調には、およそ「明るみ」の中では想像できない別の彼女といえる。彼女は緋文字を胸から剥ぎとってそれを態度で示す。

“The past is gone! Wherefore should we linger upon it now? See! With this

symbol, I undo it all, and make it as it had never been!⁶⁸⁾”

胸の徴を捨てた彼女は自然児そのものである。欠落によって「重荷」から解放されて自然の安らぎに浸るとき、逆に緋文字の象徴性は道徳的輪郭を帯びて現われる。彼女の自由に感応する森は、人間に対して己れを閉ざしている森ではなく、その闇の中に自然の生命の喜びを讃える森であった。

A crimson flush was glowing on her cheek, that had been long so pale. Her sex, her youth, and the whole richness of her beauty, came back from what men call the irrevocable past, and clustered themselves, with her maiden hope, and a happiness before unknown, within the magic circle of this hour. And, as if the gloom of the earth and sky had been but the effluence of these two mortal hearts, it vanished with their sorrow. All at once, as with a sudden smile of heaven, forth burst the sunshine, pouring a very flood into the obscure forest, gladdening each green leaf, transmuting the yellow fallen ones to gold, and gleaming adown the gray trunks of the solemn trees. The objects that had made a shadow hitherto, embodied the brightness now. The course of the little brook might be traced by its merry gleam afar into the wood's heart of mystery, which had become a mystery of joy⁶⁹⁾.

野性の合唱の中で2人の罪意識は消失する。「牧師」との決別や心の刺の忘却を教えた野性の歎きは、ディムズディルに過去が——道徳律に貫かれた心の世界が一場の夢にすぎないものと

67) *Ibid.*, p. 150.

68) *Ibid.*, p. 160.

69) *Ibid.*, pp. 60-61.

感じさせる。彼はこの森を出ると自分でも驚くほどの悖德的衝動に駆られる。高潔な白髪の副牧師に対しては不敬極まる言葉がふと湧いてきて、自製の限りをつくして辛くも止めることができたほどであり、また町の中に入ってはどうしても一行とて聖書の文句が思い出せないし、さらにまた信仰篤き処女に対して胸中でサタンの言葉を囁やき、あらゆる努力の末にこれを胸の中に止めることができたほどであった。

これまでにみる登場人格、ディムズディル、ヘスター・プリン、チリングワースにおける見事な「変身」は心理学でいう「動機づけ」によって解明できるであろうか。状況の中で現われるかれらの心理的变化を因果律を通して一貫的に解明することが可能であろうか。これには、一定の価値観を行動原理とする人格が前提でなければならぬ。チリングワースが事件の後、「裁判官のような厳格、公平な廉直さをもってただ真理のみを発見しようとする⁷⁰⁾」学者特有の精神性を捨て去ったとき、彼にとって、妻との家庭の中にみた「何処にでも散らばっている」あのありふれた「幸福」こそが、「真理」にまさる最高価値でなければならなかったはずである。この価値関係が逆であれば、彼の「幸福」を失ったことによって苦痛を受けるしろ、悪魔的な「変身」は不可能であるに違いない。またヘスター・プリンが Adultery の共犯者の名を頑として明かさずに、すすんでその罰に服し、森の中でディムズディルに胸中を語るのをみれば、「明るみ」のもとでの近隣への奉仕的態度と従順さは装いであるか、さもなくば戯れた些事ではあるまい。牧師の場合には、およそこれによる説明困難な人物である。「動機づけ」による作品の解釈がはっきりその限界につきあたるのは彼女の一人娘パールによってである。このような「動機づけ」から離れて、複合観念の絵画的描写という視点に立てば、人間固有の内面的世界の展望が開かれるかもしれない。H. ジェイムズがこれについて「登場人物

は性格としてではなく、きわめて絵画的に配置された、ただ一つの精神状態の代表者としての印象を与える⁷¹⁾」と述べていることは作品全体が一人の人間の心象風景を意味するものであろう。そこでは、光と闇、罪と道徳、感情と知性、秘密と啓示、宿命と可能性など、それぞれが内在しているというだけで、等価的なものとして自己の存在権を主張することができよう。これが人間の内的事実とすれば、ここにこそ人間のあらゆる出発点があるはずである。「光」に照らされず、啓けられない「たんに在る」だけにすぎぬ事実はキリスト教的教義の「救い」とは無縁である。この事実を生きる人間は「光」に浴さぬ「罪人」であり、このことは作者自身もその例外ではない。事実、ホーソンはそう考えていた⁷²⁾という。「救い」への意志を捨て、この事実を人間の生の宿命と甘受すれば、人間世界は「悲劇」であり、「喜劇」であるかもしれない。また、一方においてこのような「人間性に関する病的でにがにがしい見解と理論をもつこと⁷³⁾」に腐心する限り、それは H. ジェイムズのいう「悲観主義」以外のなに物でもあるまい。

パールの生はそもそもその「存在にあたって偉大な法律が破られ⁷⁴⁾」て誕生したという意味で、その存在自体が一つの象徴をなしている。「7年間、生きている象形文字として世間に提供されてきた。その中に2人があれほど秘かに隠そうとしていた秘密が現われていた⁷⁵⁾」のだ。「2人の肉体的結合であり、精神的観念の合一⁷⁶⁾」であるパールは、2人の「暗い秘密」の形象である。母親からは「人の子」であるかを疑われ、ときに「悪魔の子」と呼ばれたり、チリングワースからは、この「子供の素質には法も、権威への尊敬もなく、正しいにしろ間違いにしろ、人間の命令や意見に対する尊敬の念がな

71) H. James, *op. cit.*, p. 118.

72) R. W. B. Lewis, *op. cit.*, p. 115.

73) H. James, *op. cit.*, p. 113.

74) *Op. cit.*, p. 71.

75) *Ibid.*, p. 163.

76) *Ibid.*

70) Do.

い⁷⁷⁾」と言われるパールは状況を超えた存在として、かれらの内面的変化の前に立ちはだかる。状況の中で世界を捉える人間にはそれを超えたパールがつねに不可解な存在でしかない。彼女には「悲しみという病気がな⁷⁸⁾」い。「内」も「外」も、そして「光」も「蔭」もない。感情を通して真実だけを要求する。それゆえに彼女の「元氣も一つの病気⁷⁹⁾」なのだという母親の言葉には実感がこもる。ヘスター・プリンに「この子供は緋文字そのものであり、私が愛することができるのも、私の罪を100万倍も罰する力をもっているのもこの子供なのです⁸⁰⁾」といわれるこのパールは、身体全体を「言葉」としてかれらに「出発点」に立つことを要求しているように思われる。彼女の性格の異常性は「光」と「闇」の二元的世界に、自分の属すべき場所も類型も見出すことができないところにある。この意味では、彼女はまだ「人の子」としては生まれていないといってよいであろう。彼女の異端性、不可解性、および非現実的な性格⁸¹⁾にはたしかに「ロマンス」の形式をもってしか描きえない不可能な要求がそこに隠れているとみることができる。

IV

ヘスター・プリンとの森での出会いは、ディムズデイルの苦悩に満ちた長い過去を「現在」の感情的躍動に集束し、彼に野性的生気を吹き込んだ。しかしこれを今後の生の基調とするには、彼の過去はあまりにも重く、暗く、そして大きすぎた。過去は陰影として現在に纏わる。この「陰影」を揺曳するかぎり、新しい装いで

77) *Ibid.*, p. 106.

78) *Ibid.*, p. 146.

79) *Ibid.*

80) *Ibid.*, p. 89.

81) F. O. Matthiesen, *op. cit.*, p. 280.

But having made out a case for Pearl, who judging from other critics, may well be the most unpopular little girl in fiction, it seemed only fair to present Hawthorne at his worst.

Matthiesen は以上のように述べているが、Pearl の性格について、作者は慎重な配慮を加えているように思う。

生の始点に立とうと、所詮その「新しさ」は一場のものでしかない。だが、彼がここで得た「暗い」生命力の導きによって「闇」の住者として生きんとすれば、「牧師」との訣別は避けられない。それが苦悩からの離脱を意味する点において、この道の選択もまた「人間的」決意とみることができる。森の帰途に起こった悖德的衝動は「暗い」生命力と一体的である。だが、彼の「蔭」はより深い反省を強い、より高い所から彼自身を捉える。それは「幸福の夢にさそわれ、慎重に選択し⁸²⁾」たのちに崇高な有効性を迫ってくる。自分を「売って」しまったかどうかを問い返す彼の疑念は牧師としての、そしてまた人間としての「本来的自己」に気づいている証しとなる。質的な飛躍や超越に極限状況の自覚が不可欠であるとすれば、「本来的自己」に目覚め、苦悩を超えて新しい境地に立つディムズデイルは「光」と「闇」の両極を同時に体験し、そこに苦悩の極限をみたといえるかもしれない。

彼がニュー・イングランドの祝日に行なわれた行列に混じってその歩調や態度に示した潑刺たる元気な様子は「これまでに一度もな」かったといわれるし、観察によれば、「その力強さは肉体的なものとはみえ」ず、「精神的力強さであり、天使の助力によって与えられたのかもしれぬ⁸³⁾」ほどであったという。彼はこれまで迷路を彷徨っていたあのディムズデイルではない。彼と、この地よりの脱出を抱き続けるヘスター・プリンが「生まれ変わった」彼の姿をみて「喜々として夢にはみていたけれど、この牧師と自分自身との間にはほんとうの結びつきがありえなかった⁸⁴⁾」のではないかと思ひ込むとき、われわれは「事実にとどまるもの」と「事実から一步を踏み出したもの」との間の無限の距離を感じないわけにはいかない。失意にしながら、かつて罰のために彼女が立った処刑台に立ちつくしているとき、信徒を呑み込んだ集

82) *Op. cit.*, p. 175.

83) *Ibid.*, p. 188.

84) *Ibid.*, p. 189.

会所から響いてくる牧師の説教には畏しくも厳肅な空気で彼女を包み込んでしまう力強さがあり、その声調に潜む苦悩は聞くものに深い共感を呼び起こしていく。彼の深い説得性は自己体験における苦悩の深さの告白である。これは同時に祈りの深さとなって「誰一人、今日、彼が説教したように、あれほど思慮深く、あれほど気高く、あれほどに清い精神で説教した人はいなかった⁸⁵⁾」と聞くものにいわしめているのだ。これは彼が心の中で人知れず焼き焦がされながら耐えてきた「見えざる緋文字」の流出でもあろうか。「多くの人々の心を一つの大きな心に作る使命ゆえに彼が自己の苦しみを耐えてきたとすれば、それは「見えざる緋文字」への忠誠そのものを意味するものとみられよう。

群集にみられるためにヘスター・プリンが立った処刑台は、いまや道徳上実体的効力をもつ「見えざる緋文字」に肉体的生命力を燃焼しつくしたディムズデイルにとって避くべき場所ではなく、自己の全存在を代償とした超越の場所であり、「天上」から与えられた報償の場であろう。「天上的なもの」のためには「地上的なもの」の否定性が不可欠であるかのように、群集の前で「牧師がこのように肉体的に衰弱することはとりもなおさず、彼が天上的生命力を得たもう一つの姿にほかならない⁸⁶⁾」と作者は語っている。肉体と精神、有限と無限、事実と啓示、これら人間存在に必然的にともなう宿命的二元性の合い間で、人は多様な様態を示しながらそれぞれに己れの方角をみる。だが、超越的な生はこの「様態」を超えているがゆえに「見えざるもの」としてある。「天上的生命力を得たもう一つの姿」をみせるディムズデイルは、「様態」を超えてこの「見えざる」生に立っているといえるであろう。ヘスター・プリンは生の苦しみを媒介に転化しうる啓示的世界を欠く。近代的自我の宿命に似て個々の事実を彷徨する彼女は、「男と女」との関係においても、「人と人」との関係においても、いまの牧師との距離

を埋めることができない。逆に彼女は弱々しい微笑を湛えるディムズデイルから、森で2人が夢みたことより処刑台に立った方がよいとつき放されている。

“Is not this better”, murmured he (Dimmesdale), “than what we dreamed of in the forest?”

“I know not! I know not!” she (Hester Prynne) hurriedly replied. “Better? Yea; so we may both die, and little Pearl die with us!”

“For thee and Pearl, be it as God shall order”, said the minister……⁸⁷⁾.

彼に蘇えった精神的生命の代償が肉体的生命の消滅である以上、もはや2人の間の紐帯はない。行列のさいにみたあの輝やきは、彼の頬から灰のごとくに燃えつきている。彼は「死の色を帯びて生命ある人の顔とも思われなかったし、弱弱しくよろめき歩き、よろめきながら倒れもしないのは、内に生命をもつ人とは思われな⁸⁸⁾」いほどであった。彼の肉体的生命の終焉が苦悩からの解放であることは、言い換えれば、チリングワースにとって復讐対象の喪失であり、それはそのまま彼の生の自己解体を意味するものにほかならなかった。牧師の苦悩に生の支えを置く彼が、処刑台上に立とうとする母娘を止めようとするときの絶叫は彼の生への執念を示すものである。

“Wave back that woman! Cast off this child! All shall be well! Do not blacken your fame, and perish in dishonor! I can yet save you! Would you bring infamy on your sacred profession?”⁸⁹⁾

「自分のものにしてみせる⁹⁰⁾」という意志の

85) *Ibid.*, p. 196.

86) *Ibid.*, p. 198.

87) *Ibid.*, p. 200.

88) *Ibid.*, p. 198.

89) *Ibid.*, p. 199.

90) Do.

実現に全知を投入しながら、「その男」ディムズデイルの最後の姿をみて、自分の全世界の瓦解を内部に感じるチリングワースが、「私から逃げてしまったな⁹¹⁾」と洩らす言葉には、どこにも定着の場を見失ったものの嘆息と絶望とに満ちている。

ディムズデイルの立場はもはや明白である。真摯な信仰のもとに、地上的生にともなって生起する諸事実を眼下にみる。チリングワースの手を逃れ、ヘスター・プリンには最後の別れを告げるかのように「神を忘れたとき、互いの魂に対する畏敬の念を踏みにじったとき、すでに来世での清純な生を望んでも無駄なことなのだ⁹²⁾」と告げるディムズデイルは誰の手にも届かない境地に達している。宗教的感情によってしか「現存」を超え出ることができない人間の不条理の宿命こそ、人間存在の不完全性の証明にほかならない。だが、この事実の自覚のうちに人間としての出発点があるとすれば、その後の責任はいっさい個人の選択に委ねられている。T. マーチンの「人間存在の代償とは不完全性⁹³⁾」にあるという見解はこの事実を指摘したものにほかならない。もし前述の牧師の言葉のうちに作者自身の隠された道徳的主張や期待を見出さうのものであれば、超越的な生は実存者に「必然的な苦悩」を要求しているものとみることができよう。言い換えれば、この種の苦悩は「あるべき姿としての人間」として不可避的条件ともいうことができる。パールの不可解さとはなんであったか。上記のことと結びつけて考察すれば興味深い背景がわかる。森の中でディムズデイルが求めた接吻を拒絶したパールはその臨終の際に彼に答える。

Pearl kissed his lips. A spell was broken.

91) *Ibid.*, p. 202.

92) *Ibid.*

93) T. Martin, *op. cit.*, p. 70.

T. マーチンは *The Birthmark* に触れてつぎのように述べている。

As explicitly as a tale can, *The Birthmark* tells us that to be is to be imperfect, that the price of human existence is imperfection.

The great scene of grief, in which the wild infant bore a part, had developed all her sympathies; and as her tears fell upon her father's cheek, they were the pledge that she would grow up amid human joy and sorrow, nor for ever do battle with the world, but be a woman in it. Towards her mother, too, Pearl's errand as a messenger of anguish was all fulfilled⁹⁴⁾.

パールが激しい感情の発作や変化をその態度に表わしたのは、彼らの二面性が彼女の直覚に触れたときであった。感情の激昂は自己主張にほかならない。子供らしい自己主張でないところに、子供としての不可解さがあった。二面性を駆逐し、真実を要求する自己主張は高い道徳性に支えられているものであり、したがって、そこにはかなり作者の意図が混入しているものと見なければならない。彼女の道徳的要求は直接的感情によってなされてきたもので、言葉によってでなければ事実によってでもない。要求はある種の状態における不完全性や欠落が前提であり、これは罪意識が現存の状態と悔いとの間における感情的往復運動であるのと似ている。「罪」によって生まれ、「罪」の授乳で育ったパールは、実の父親の二面性が消え去ったとき、まさしくその「使命」は終わっているのである。「使命」の終了により、つまりはディムズデイルの「罪」の贖いとしての死によってチリングワースが過去全体と可能性を喪失したとき、パールはこの世における新たな可能性を得ることになる。

作者は事件の「光」と「闇」との合い間をくぐり抜けたのちにも、新しい世界を掲げてはいない。ただ登場人物はそれぞれ個人としての方向を暗示されているにすぎない。あるいは「この世界」には「新しい」ものはなく、限りない「光」と「闇」との絡合いがあるだけなのかもしれない。

94) *Ibid.*, *op. cit.*

このことは『緋文字』の興味が「一定の変化には富んでいるけれども、ほとんど進行することがなく、執拗にわれわれの前に提示され続けている⁹⁵⁾」という H. ジェイムズの不満の原因となるものかもしれない。人間内部の心情と知性との対立はホーソンの一貫したテーマであった。「初め」があるだけであり、そして「初め」がすべてである。したがって「進行を欠く執拗さ」も、結末における暗示もこの作品のもつ必然性とみることができるかもしれない。最後に「人間性」の覚醒を促すように述べる道徳的命令は、この作品の結末に相応しいものである。

“Be true! Be true! Be true! Show freely to the world, if not your worst, yet some trait whereby the worst may be inferred!”⁹⁶⁾

さらに破滅の道をひたすら突き進んで、いっさいを失ったチリングワースに対しては、ニュー・イングランドとイギリスにあったといわれる多額の遺産を、生まれ変わったパールに残したことを彼がなした唯一の人間的行為と評したのち、その最終的处理を風聞の中に埋めてい

る。マシーセンが「ホーソンの中心的テーマは罪自体でなく、人間の生に対するその結果である⁹⁷⁾」という含みある言葉は実存の意識の中で、作用する罪の存在的意義を捉えたものとみることができよう。

対象化のうちに、あらゆるものから規定的諸関係を断ち、あらゆる生あるものを抽象化のうちに部分へと解体することに腐心する知性は、「科学万能」の盲信を人々に惹らし手離しの称賛と期待を受けて19世紀の時代を彩どった。伝統や文化を含め、いっさいの人間的なものが危機に瀕したときに激しい「宗教論争」の必然性を歴史のうちにわれわれはみる。このような状況の中で『緋文字』は「地方的風土」に生まれながら、時代の先端的問題を見事に捉えている。ここには知性の心情に対する優位性への懐疑があり、心情自体の高慢さへの糾弾がある。思惟の自己展開に「近代」の性格をみる以上、『緋文字』の問題は「近代的」人間が、好むと好まざるとにかかわらず、逢着しなければならない宿命的問題でもある。そしてそこには、つねに個人の選択のための「初め」があるだけにすぎない。

95) H. James, *op. cit.*, p. 118.

96) *Op. cit.*, p. 204.

97) F. O. Matthiesen, *op. cit.*, p. 343.